

一冊でわかる！

## 本田宗一郎

梶原 一明 著

著者は、雑誌『財界』の記者として豊富な人脈とデータを蓄積し、経済誌、週刊誌を中心に活躍中である。中でも本田宗一郎に関する著書は多数ある。今回の著書は、表題どおり一冊で本田宗一郎がわかる入門書である。

第1章の「本田宗一郎の生涯」は、ものづくりの環境で育っていく少年時代から語られていく。宗一郎の自動車への強いあこがれが、丁稚奉公での修行が後の偉大なホンダの創業者としてのスタートである。

生涯一番つらかったというピストンリングの研究開発では、旧制浜松高等工業学校の聴講生として学び、悪戦苦闘しながら前向きな姿勢を貫く宗一郎を著者は語る。「ある意味では、一を聞いて十を知る、ということだ。これは天才的な才能と技術センスがなければ不可能なことだろう」

さらに、著者は年代を追って、戦後、ホンダ技研工業株式会社を設立した後の主な技術開発を紹介している。

ドリームD型誕生、盟友・藤澤武夫、ドリームE型完成、カブF型のDM作戦、4億5千万円の工作機械、マン島TTレース、スーパーカブ、ホンダ技術研究所、初の四輪車S360、鈴鹿サーキット、F1の初参戦、N360大ヒット、CVCCエンジン開発などである。

第2章は、「本田宗一郎の挑戦」として、マン島TTレース出場、四輪車への参入、F1制覇、CVCCエンジン開発を取り上げている。冒頭に「マン島TTレース出場宣言」全文を載せ、マン島TTレースに出場し、優勝、世界制覇を目指した意気込みを紹介する。

しかし、この時のホンダは経営危機に瀕して

いた。この危機を盟友である藤澤武夫が切り抜ける。会社の難局にあっても果敢に挑戦する。これぞホンダイズムと著者は言う。マン島TTレースに出場するまでの世界との技術力差への挑戦、さらには、世界グランプリでの活躍は、読者の気持ちを高揚させる。

著者は、挑戦するホンダとして独自の技術開発を進めるが、「宗一郎は開発の先頭に立ち、枝葉末節に至るまで口を出した。その鋭い直感や発想によって解決する問題も多かったが、あまりにも頑固でスタッフを閉口させることもあった。」と記述する。そのやり取りが読者にも見えるような気がする。

第3章「本田宗一郎の仕事術」は、多くの本田語録を載せその奥深い内容を解説している。

冒頭は、本田宗一郎そのものである「チャレンジすることで道は開かれる」から始まる。

「ダメでもいいからやれ。体験もしないでお前ら、すぐに『ダメだ』って言うのは、学校で聞いた話だろう。やってみもせずに何を言っとるか」この一喝で、社員は反論できなくなってしまった。

「既成の観念にとらわれることほど、人の考えを誤らせ、道を閉ざすものはないんです。常識にそって押し進めていくと、ホンダそのものが立ち行かなくなる。常識を破る。そのことでしか会社の永続はない。ずっとそう確信してやってきた」常識を打ち破ることで会社を発展させてきた含蓄のある言葉である。

今日、マスコミは、経済危機、若者の雇用、ものづくり後継者、企業倫理、安全性など様々な点で、ものづくりの課題を報道している。

著者は、はしがきの最後に「こんな時代だからこそ、宗一郎の物語を心ゆくまで味わってほしい。元気が出ること請け合いである」と述べる。若者にぜひ読んでもらいたい一冊である。

(PHPビジネス新書、222頁、780円) (田中 正一)